

法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

＜調査報告＞ マニラのホームレス：仕事・貧困・家族

著者	青木 秀男
出版者	法政大学大原社会問題研究所
雑誌名	大原社会問題研究所雑誌
巻	687
ページ	66-82
発行年	2016-01-01
URL	http://hdl.handle.net/10114/12100

マニラのホームレス

——仕事・貧困・家族

青木 秀男

- 1 課題と構成
- 2 ホームレスの研究
- 3 ホームレス調査の結果
- 4 マニラのホームレス

1 課題と構成

フィリピン・マニラ（首都圏，以下マニラと呼ぶ）の街路にホームレス（rough sleeper，以下同じ）が増えている。その数は，10万人を超えると推定される（青木，2013：160）⁽¹⁾。本稿は，マニラを事例に，困窮者が街路へ至る過程，街路での仕事とネットワークについて分析し，（一つの）ホームレス像（homelessness）を構成する。本稿は，2つの課題と部分からなる。一つ，筆者の先行研究から，マニラのホームレス（問題）をめぐる事実と知見について整理する。そして，マニラのホームレスの全体像に接近する。二つ，筆者らがマニラで行ったホームレスの面接調査のデータをもとに，ホームレスをめぐる基本事項について分析する。そして，前段で描かれるホームレス像の（一つの）検証を行う。

2 ホームレスの研究

ホームレスとはだれのことか。マニラのホームレスを特定するには，2つの技術的な困難が伴う。一つ，マニラの街路には，物売り，廃品回収人，物乞い，輪タク運転手，小型バスの客呼び込み（barker），大道芸人等の働く人々がいる。それらの多くは，夜は街路外の自宅に帰る人々である（場所はスクオッター地区が多い）。一部は街路に留まり，街路で寝る。後者がホームレスである。ホームレスを特定するには，夜遅くまで街路の人々を観察しなければならない。二つ，ホームレスとスクオッター居住者（以下スクオッターと呼ぶ）の区別である。スクオッターの底辺層は，しばしば

(1) 筆者は，社会福祉開発省（Department of Social Welfare and Development）による困窮者援護活動の資料，マニラ首都開発局（Metro Manila Development Authority）による街路清掃活動の資料，公営のホームレス・シェルター（Jose Fabella Center）による収容者の資料およびストリート・チルドレンの先行調査をもとに，マニラのホームレス人口を推計した。

街路で寝ている。そもそもスクオッターも、居住権をもたない「ホームレス」（スクオッター・ホームレス）である。他方でホームレスは、小屋や廃車の中で寝る。店舗の壁や樹木にシートをかけて雨露を凌ぐ。では小屋や廃車、店舗の壁、シートは住居ではないのか。このように、ホームレスとスクオッターの区分は、ボーダーレスである。とはいえそれでも、ホームレスとスクオッターでは、集団の中心特徴が異なる。スクオッターは、定住する人々である。人々は、コミュニティをもち、居住権がなく不安定とはいえ、持続的な生活を送っている。これに対して、ホームレスは、非定住の人々である。人々は住居をもたず、いつも街路を移動している。生活は孤立的で不安定である。街路に家族のコミュニティがあっても、家族丸ごと流動的で、その絆は切断と再結合を繰り返している。

これまで、マニラのホームレスは、スクオッターの一部とされ、固有の問題を抱える人々とは見做されなかった。ホームレスへの社会的関心は弱く、ホームレスに関する研究も少数に留まった。マニラにホームレスはいても、ホームレス問題はなかった。このような事情のなか、筆者は、貧困やスクオッターの先行研究、行政資料、新聞記事に散在するホームレス情報、およびホームレスの参与観察と聞き取りをもとに、ホームレスの調査研究を進めてきた（青木、2007;2011;2013）（Aoki, 2008; 2013）。そこで得られた知見から、マニラのホームレスをめぐる、次のような事実と論点が指摘される⁽²⁾。

ホームレスの来歴

グローバル経済のもと、マニラでホームレスが増えている。グローバル経済がホームレスを生じる過程は、プッシュ・プル仮説により説明される。プッシュとは、困窮者を街路へ押し出す力をいう。そこには、3つの要因が確認される。一つ、階層全般の下降圧力が強まり、スクオッターの下層、インフォーマル職種の下層（の一部）が街路へ押し出された。二つ、スクオッター地区の撤去が増え、新たな住居を確保できない人々が街路へ押し出された。三つ、行政の財政逼迫により、困窮者のホームレス化を押し止める施策と、ホームレスを街路から救済する施策が頓挫した。プルとは、困窮者を街路へ誘う^{いざな}力をいう。一つ、グローバル経済のもと、コンビニやレストランが増え、街路に廃棄食料等の生活資源が増えた。物乞いの機会も増えた。二つ、同じく、雑業的仕事（miscellaneous job）⁽³⁾が増えた。警備員や駐車場の整理員等、新たな仕事も現れた。こうして、より多くのホームレスが街路生活を凌ぐことが可能になった。

次に、ホームレスはどこから来るのか。ホームレスの来歴は、5つに整理される（それぞれの人口規模は不明である）。一つ、スクオッター地区から来た人々である。都市空間が再開発され、多くのスクオッター地区が撤去されている。排除された人々は、親族の家や再居住地へ移転する。それが叶わない人々は、街路に留まり、ホームレスになるしかない。その人口規模は大きく、この人々がホームレスの最大給源をなすと思われる。二つ、スクオッター地区を出た人の多くは、再居住地へ移転する。しかし再居住地は、マニラから離れた隣接州の山の中にある。そこに仕事は少なく、

(2) 筆者の著書・論文からの引用において、発行年、引用頁等の逐一の注記は割愛する。

(3) 隅谷三喜男は、労働者階級が未成熟な段階の近代都市の職種群を都市雑業と呼んだ（隅谷、1967：63-66頁）。それは、途上国都市のインフォーマル職種とかなり重なり合う。

病院・学校等の生活施設も乏しい。そのため多くの人がマニラへ舞い戻る。しかしマニラにもう家はない。新たな住居を確保できない人々は、街路で暮すしかない。三つ、多くの人が、地方からマニラへ来ている。大方の人々は、親類縁者が住むスクオッター地区に入る。頼る当てのない人々は、ターミナル周辺の街路で当座を凌ぎ、ホームレスとして徐々に市内に散っていく。四つ、グローバル経済は、人々の生活を圧迫している。最低賃金以下で働く人、貧困線以下で暮す人が増えている。正規雇用者が非正規雇用者へ、非正規雇用者が雑業就労者へと、階層を下降している。零細な仕事を始めた人々。それもできない人々。住居がなく頼る当てもない人々。この最後の人々は、街路で暮すしかない。五つ、ストリート・チルドレンである。マニラにストリート・チルドレンが多い。彼女らは学校に行か(け)ない。ゆえに、行政やNGOの援護に恵まれない限り、街路生活を脱け出すことはできない。子どもらは、街路で生れ育ち、パートナーを得て、子を設ける。そして(ファミリー・)ホームレスになる。彼女らは、世代をかけて・超えて、街路でホームレスを再生産する。

ホームレスの構成

ホームレスは、どのような人々からなるのか。マニラの街路を管理・統制する首都開発局(注1を参照。以下同じ)は、街路でホームレスを保護し、公営シェルターであるホセ・ファベラ・センターへ送っている。また社会福祉開発省は、マニラの街区ごとに困窮者の援護を行っている。それらの資料によれば、保護されたホームレスには、男性/女性、単身/家族、健常者/身体・精神障害者、ストリート・チルドレン(親がいる子/いない子)、先住民が含まれる(MMDA, 2011)(JFC, 2011a)(DSWD-NCR, 2011)。またホセ・ファベラ・センターは、援護したホームレスを物乞い(mendicant)、「浮浪者」(vagrant)、移動者(transient)に分類している(JFC, 2011b)。これらの情報は限られたものであるが、それでもマニラのホームレスについて、次のことを伝えている。一つ、女性が多い。二つ、子どもが多い。三つ、家族連れが多い。四つ、障害者が多い。五つ、先住民がいる。六つ、シェルターを出たホームレスが少ない。ここに、深刻な困窮状態、緊密な家族関係、乏しい行政施策という、途上国都市マニラのホームレスの特徴が浮かび出る。

ホームレスの地域分布

都市の再開発とジェントリフィケーション(gentrification)により、地価の高い都心部よりスクオッター地区が撤去されている。スクオッター地区は、次第に周辺部へ移動している。スクオッター地区を出た人々は、親類縁者の家や再居住地へ移転する。移転する住居がない人々は、街路に留まる。ホームレスは、街路に生活資源と仕事が多いダウンタウンを離れて暮すことはできない。こうして、スクオッターは郊外化(またはドーナツ化)し、ホームレスは都心化しつつある。

ホームレスは、具体的にマニラのどこにいるのか。ホームレスは、街路、舗道、歩道、ターミナル、繁華街、市場、公園、教会広場、墓地等で暮す(本稿は、これらをまとめて「街路」と呼んでいる)。なぜこれらの場所なのか。そこには4つの事情がある。一つ、金銭や食料の生活資源が確実に得られる場所である。そこは、通行人や乗り物客、買い物客、観光客、教会参詣者がおり、いつも生活資源の余剰がある。ホームレスは、それらを物売り・廃品回収・施しにより受け取る。二つ、静かで安全に休むことができる場所である。ホームレスは、日ごと、週ごと、月ごと、時には

年ごとに寝場所を変える。彼女らにとって大切なことは、静かで安全に体を休める場所である。ホームレスは、最良の場所を寝床に定める。そのような場所を確保することは容易でない。ゆえに、ホームレスの移動範囲は大きくない。三つ、教会やNGOが、ホームレスに炊出しや医療ケア、生活相談を供する場所である。ホームレスは、食料や医療相談等の援護を求めて教会の広場に集まる。炊出しの日ごとに、教会を巡回する人もいる。四つ、ホームレスは、警察・行政が街路を厳しく統制し、「違法行為」を摘発する場所を回避する。そこは人が多く、生活資源が多い場所でもある。ゆえに、警察・行政とホームレスの場所をめぐる攻防が生じる。ホームレスの取締りの厳しさは、自治体により異なる。ビジネス地区（たとえばマカティ Makati）やダウントウン（たとえばクバオ Cubao）では、ホームレスの取締りが厳しい。マニラ市（City of Manila）の旧都心部（マラテ Malate）は、ダウントウンを含むが、ホームレスの取締りが緩やかである。港湾・市場を含むトンド（Tondo）も、取締りが緩やかである。ゆえに、そこにはホームレスが多い。

空間の政治

行政資料によれば、ホームレスは、マニラのほぼ全域にいる（DEWD-NCR, 2011）。そのうえで、ホームレスがいる場所は、地区の空間の政治に規定される。ホームレスの空間分布は、行政による公共空間の管理の関数である。マニラの「公共空間の政治」は、次のように要約される。

一つ、マニラに多くのスクオッター地区がある。それは、公園、河川敷、鉄道敷、ゴミ捨て場等の公共空間に立地する。人々は、そこに何年も住み、時には祖父母の時代から住んでいる。人々にとって、そこは私的に占有された擬似公共空間（pseudo-public space）（Drummond, 2000）である。これは街路の場合も同じである。街路は、困窮者の住居の延長である。人々は、街路で顔を洗い、食事をし、仕事をし、遊ぶ。街路は、私的に占有された擬似公共空間である。

二つ、公共空間の私的な占有は、慣習的に容認されてきた。それは法にも反映されている。スクオッター地区の撤去には法的規制がある。都市開発住宅法（Urban Development Housing Act）は、公有地のスクオッター地区の強制撤去を禁じている。撤去するなら行政は代替の居住場所を補償すべしと謳っている。こうした法的規制は、実際は建前のものである。しかしそれでも、恣意的な住居撤去の歯止めになってきた。事情は街路も同じである。露天商による街路の占有は、慣習的に黙認されてきた。ゆえに、立ち退くなら行政は代替の場所を補償すべしという、暗黙の了解がある。ホームレスもこれに準じる。ホームレスには、街路の同じ場所に長期に住み続ける人がいる。彼女らの街路居住も、市民や行政により黙認されてきた。

三つ、しかし近年、行政は、都市再開発とインフラ形成、公有地の私有化を進め、公共空間の統制を強めている。スクオッターは、長年住み続けた場所を排除されている。露天商も同じである。行政・警察により、街路の物売りが禁じられている。こうした状況は、ホームレスにもっとも厳しい。ホームレスは、市民や行政から街路居住を黙認されてきた。しかし他方で、街の美観を損なう目障りな存在でもあった。街路を移動するホームレスには、ネットワークも組織も運動もない。ゆえにホームレスは、行政・警察に抵抗する力をもたない。彼女らへの市民の同情も小さい。ホームレスは、取締りの度にただ場所から場所へ逃げ回る。黙認されれば街路に留まり、追い立てられれば別の街路へ移動する。

四つ、マニラの公共空間に、排除と抵抗の序列が観察される。排除と抵抗は、逆相関の関係にある。もっとも排除されやすいのはホームレスであり、次いで露天商、最後にスクオッターである。排除に対する抵抗がもっとも大きいのはスクオッターであり、次いで露天商、もっとも小さいのはホームレスである。しかしスクオッター、露天商、ホームレスがどう抵抗しようと、都市再開発の力は圧倒的に強い。彼彼女らの全体が、徐々に公共空間から排除されている。擬似公共空間が消滅し、マニラの都市空間の景観は、欧米都市に収斂しつつある。

3 ホームレス調査の結果

調査と面接

筆者らは、ホームレスの国際比較研究のプロジェクト（本稿最後の注記を参照）のマニラ班を担当し、2013年3月14日～11月27日の間に、マニラの29人のホームレスに対して、質問紙票による面接調査を行った⁽⁴⁾。調査対象者は、ダイレクトに、または知り合いのホームレスの紹介を通して選ばれた。その際、対象者は、男性と女性の均衡、若年と中高年の均衡、対象者の生活スタイル（街路、教会、公園、墓地等の対象者のいる場所）の均衡を配慮して選ばれた。面接は1対1で、調査結果の利用における個人情報の守秘と人権への配慮を約し、了解を得たうえで行われた。用いられた言語は英語とフィリピン語である。

以下に、調査結果（各調査項目の回答の単純集計）の分析と解釈を行う。そして、マニラのホームレス像の一端に接近する。マニラのホームレスの全体像を伝える先行の研究や資料はない。ゆえに、本稿でホームレス像の全体像に接近するには、散在するホームレス情報を参照し、数字の意味を解釈するしかない⁽⁵⁾。以下の調査結果は、前節で示したマニラのホームレス像の検証（の一つ）としてある。

(1) 面接場所

ホームレス（29人。以下回答者と呼ぶ）の面接場所は、表1をみられたい。併せて、就寝場所を示す表2をみられたい。

回答者の面接場所と就寝場所は、ほぼ一致する。表1の「教会」は炊出しに來たマラテ教会(Malate Church)であり、「公園」は、回答者が物売りをするリサール・ルネタ公園(Rizal-Luneta Park)である。それらは、就寝場所ではない。その他は就寝場所（付近）での面接である。表2の「借間」とは、行政がホームレスに斡旋した安い部屋である（2畳ほどの空間で部屋代は月3,000ペソ。電気は夕方6時から朝8時まで。3ヶ月滞納したら部屋を出なければならない）。「元住居付近」とは、スクオッター地区の住居を撤去されたが、行く当てがなくその隣の街路で起居する回答者である。

(4) 当調査の面接調査を行ったのは、Boonlert Visetpricha (Thammasat University), Fred Cabredo (当時 NGO, Kanlungan sa ERMA), John Lagman (NGO, PAKISAMA), 吉田舞 (特定非営利活動法人社会理論・動態研究所) の4人である。筆者は、調査全体を統括し、調査結果を集約した。

(5) 筆者は、別稿でホームレスの国際比較のための「比較の方法」について論じた(青木, 2012)。比較研究は、事例の特徴を浮き彫りにし、相対化する最良の方法の一つである。筆者はそこで、アメリカ、日本、フィリピンのホームレス類型を提示した。本稿は、その議論には立ち入らない。

表1 面接場所

街路	11
教会	6
公園	4
空き地	3
墓地	3
元住居付近	2
計	29人

表2 就寝場所

街路	13
海岸の街路	5
空き地	3
墓地	3
元住居付近の街路	2
ガーデン	2
借間	1
計	29人

「墓地」とは、マニラの北部墓地（North Cemetery）で、墓地に住んで墓守りや物売りをする回答者である。筆者の目視調査によれば、マニラのホームレスは、（ターミナルや繁華街の）街路、市場、公園、教会広場、空き地、墓地に多い。当調査の面接場所は、ホームレスの目視場所にほぼ対応する。とくに墓地のホームレスは定着型であり、元住居付近のホームレスは半定着型である。双方とも、街路の非定着型のホームレスと生活スタイルを異にする。当調査は、異なる生活条件にあるホームレスを回答者に含んだと思われる。

(2) 性別と年齢構成

回答者は、男性12人、女性17人（内レズビアン3人）である。女性が多い。マニラのホームレスに女性が多いことから、ほぼ妥当な構成と思われる。これは、後にみるように、当調査で家族連れのホームレス（ファミリー・ホームレス）が多い事実に関連する。レズビアンが含まれる。フィリピンにはレズビアンが多く、これも自然のことと思われる。

次に、回答者の年齢構成である。回答者の平均年齢は、42.2歳である。表3をみられたい。

表3 年齢

20歳代	2
30歳代	12
40歳代	7
50歳代	7
60歳代	1
計	29人
平均年齢	42.2歳

30歳代を中心に40歳代、50歳代と、壮年の稼働年齢層が多い。最高齢者が60歳代（1人）である。実際に、ホームレスに高齢層は少ないと思われる。ホームレスの国際比較を行う当調査プロジェクトでは、調査対象が成人ホームレスに限定された。そのため、ストリート・チルドレンとされる10歳未満・歳代の若年層は、調査対象から外された。回答者の年齢は、街路生活を始めた年齢と

その期間の年数に規定される。後にみる通り、回答者の多くは、若い頃にスクオッターに居住し、その後ホームレスになり、そのまま長期にホームレス状態にある。年齢階層で稼働年齢層が中心という構成は、その結果である。

生活歴

当調査において、回答者の出身階層を直接に示す質問項目は、設定されなかった。ここでは、回答者の生活歴の一部、つまり、家族背景、学歴、最長職（調査時までにもっとも長い間就労した仕事）を分析して、その出身階層を推定する。

(1) 家族背景

回答者（29人）は、どのような家族のもとで生育したのか。表4をみられたい。

表4 家族背景（複数回答。事情は回答者の言葉通り）

父の問題行動	6	親の再婚	4
ギャンブル	1	父	1
暴力	3	母	3
犯罪	2	父が扶養	(1)
親族が扶養	(1)	母が扶養	(2)
親の問題行動	1	親の死亡	3
子の遺棄	1	父	1
両親不知	1	母	1
親族が扶養	(1)	両親	1
家族崩壊	1	親族援助なし	(1)
親の離婚	6	貧困	4
父が扶養	(2)	親族援助なし	(1)
母が扶養	(2)	紛争で移住	2
親族が扶養	(2)	生活に余裕があった	4
		不明	1
		計	33人

多くの回答者が、常態的または一時的に、崩壊寸前の家族のもとにあったことが分かる。「崩壊寸前」には、2つの事情が含まれる。一つ、父親の暴力・問題行動、両親の不和による家族崩壊である（9人）。二つ、両親の離婚・再婚、親の死去である（13人）。この結果、回答者は、子ども時代に一人親家族で生育する、親族に扶養されて生育する、それもなく（親族も困窮家族である）自力で暮す等の状態にあった。多くのケースで、親の問題行動や離婚・再婚の背後に、さらに死去（しかも若死に）の背後にも、困窮生活があったと思われる。これに「貧困」家庭にあった回答者（4人）が加わる（いずれも「おもな」事情であり、そこには親の問題行動や死去の事情もあったと思われる）。これらとは逆に、「生活に余裕があった」は4人に留まる。「紛争で移住」は、ミンダナオ島（Mindanao Island）におけるフィリピン国軍とムスリム武装勢力の戦闘から避難した家族である。この家族は、まずミンダナオ島のダバオ（Davao）に移住し、その後マニラへ来た。この家

族も、移住先で困窮生活を送ることになる。こうして、大半の回答者が、困難な家庭環境のもとで生育した。

(2) 就学経験

そのような家族背景のもと、回答者の就学経験はどうであったのか。表5をみられたい。

表5 就学体験

	中退	修了	計
小学校	8	4	12
ハイスクール	6	5	11
カレッジ	3	3	6
計	17人	12人	29人

最終学校の中退（中途退学）者と修了者を合わせると、小学校12人、ハイスクール11人、カレッジ6人となる。ここで、3つのことが指摘される。一つ、小学校の就学経験もない完全な未就学者はいない。ただし、小学校へ1年しか就学しなかった回答者が2人いる。二つ、カレッジの就学経験者がいる。家族の経済状態に余裕があった、少なくとも働かなくてよかった回答者がいる。小学校・ハイスクール・カレッジのいずれも、回答者の数が少なく、また就学時期が異なるので、フィリピン全国の就学率との比較はできない。三つ、最終学校終了（学歴）についてみると、無学歴者8人、小学校修了者10人、ハイスクール修了者8人、カレッジ修了者3人となる。フィリピンでは一般に中途退学者が多いが、それを考慮しても、無学歴者・小学校修了者の数は多いと思われる。回答者の全体が、低学歴の傾向にあったと思われる。

(3) 最長職

そのような就学体験と学歴にある回答者が、過去にもっとも長く就労した仕事はなんだろうか。表6をみられたい。

表6 最長職

車の運転手	2	メイド	1
労働者	6	ガードマン	1
農業	(3)	輪タク運転手	1
工場	(2)	墓守り	3
建設	(1)	ヴェンダー	4
交換手	1	廃品回収人	1
販売員	1	マニキュア師	1
伝道師	1	駐車場誘導員	1
接客員	4	セックスワーカー	1
		計	29人

「車の運転手」とは、私邸・銀行の車の運転手である。「伝道師」とは、キリスト教のそれである。それは教会派遣の伝道師ではなく、お布施（物乞いに近い）で暮す自称「伝道師」である。「接客員」とは、ディスコ、ビヤホール、バー、レストランの接客係である。回答者の最長職は、3つの階層に分類される。①「車の運転手」「労働者」「交換手」「販売員」等の雇用職である（10人）。②「輪タク運転手」「伝道師」「墓守り」「ヴェンダー」「廃品回収人」「マニキュア師」「駐車場誘導員」「セックスワーカー」等の零細自営または一人仕事である（13人）。③「接客員」「メイド」「ガードマン」等の中間に位置する仕事群である（6人）。つまり、①は雇用職、②はインフォーマルな雑業労働で、ホームレスを含む下層民の仕事、③はその中間で、時にはホームレスも就労する仕事群である。ここから2つのことが分かる。一つ、①は雇用職であるが、資格もスキルも要しない（と評価されている）、低い職業的威信にある仕事群である。初職（学校を出てすぐに就労した仕事）は不明であるが、その職業的地位は、最長職とそれほど変わらないと思われる。つまり、大半の（すべてではない）回答者は、困難な家族背景、低い学歴に制約されて、最初から労働市場の底辺の仕事を遍歴し、街路の雑業の仕事に辿り着いたと思われる。ここに、労働市場の下層世界を還流し、街路へ下降するという、労働移動の閉じた過程を見ることができる。二つ、最長職にしてすでに、雑業の仕事の就労者が多いことである。そこにはさらに、2つの事情がある。まず、上記①の雇用職が、不安定で、容易に雑業の仕事に下降する状態にあったことである。③の境界的位置にある仕事群は、いっそう不安定であった。次に、回答者が長い間ホームレス状態にあったため、人生の職歴において雑業の仕事の就労期間がもっとも長くなったことである。ホームレスになってからの仕事については、3節で分析する。

こうして、大半の回答者は、崩壊寸前の家族のもとで生育し、一定の就学体験をもつものの、低位な仕事に就労し、労働市場の底辺を還流して、街路の雑業の仕事に辿り着いた。ここに、回答者がホームレスになる（なるべくしてなった）過程の必然をみる。

（4）生育地と移住

回答者（29人）の生育地は、マニラ7人、マニラ外22人である。マニラ外では、（マニラを除く）ルソン島（Luzon Island）10人、ヴィサヤ諸島（Visaya Islands）7人、ミンダナオ島5人である。ここから、次のことが指摘される。

一つ、回答者にマニラ生れの人がいる。グローバル経済のもと、マニラの底辺層が、地方移住者の二世・三世により補填されつつある。彼女らは、移住者一世の困窮生活を脱することができていない。底辺層に留まり、生育し、家族をつくって、底辺層の人口を補填する。これに、グローバル経済の階層下降の圧力が加わる。その結果、困窮者の一部が街路へ押し出される。これが、マニラ底辺層の一般的事情である。マニラ生れのホームレスは、増えていると思われる。当調査のマニラ生れの回答者は、その一部である。

二つ、回答者の生育地が、ルソン島のほか、フィリピン全土にまたがる。そもそもマニラ人口の多くが、全土からの移住者からなる。回答者は、いつマニラに来て、マニラにどれくらい住んでいるのか。まず、マニラ移住時の年齢についてみる。表7をみられたい。

10歳未満・10歳代が12人、20歳代が5人と、「マニラ生れ」「不明」を除く22人中17人が、若い頃にマニラに来ている。マニラ移住時の平均年齢は、21.5歳である。10歳未満の回答者は、親と

ともにマニラに来たと思われる。20歳代の回答者は、親とともに、または学校を修了ないし中退してすぐにマニラに来たと思われる。30歳代の回答者は、転職してマニラに来たと思われる。

次に、マニラ在住の期間である。表8をみられたい。

表7 マニラ移住時の年齢

10歳未満	3
10歳代	9
20歳代	5
30歳代	1
40歳代	0
50歳代	2
マニラ生れ	7
不明	2
計	29人
平均年齢	21.5歳

表8 マニラ在住期間

1年未満	1
1年以上～2年未満	0
2年以上～5年未満	1
5年以上～10年未満	1
10年以上～20年未満	6
20年以上～30年未満	6
30年以上～40年未満	2
40年以上	4
マニラ生れ	6
不明	2
計	29人
平均年	23.1年

マニラに来て10年以上の回答者が、「マニラ生れ」「不明」を除く20人中17人を占める。10年未満は3人、さらに1年未満は1人にすぎない。平均在住期間は23.1年である。10年以上の回答者は、移住一世ではあれ、マニラに深く同化した人である。これも、移住者の多くが、すでにマニラ在住が長く、困窮生活を抜け出せないまま、底辺層の大きな部分を構成しているという、マニラ底辺層の一般的傾向に照応する。

地方からの移住者は、どのような事情でマニラへ来たのか。表9をみられたい。

表9 マニラ移住の事情

マニラ生れ	7
仕事を探しに	11
人間関係の揉め事で	5
家族関係で	4
紛争を逃れて	2
勉強のため	1
不明	3
計	29人

マニラへ来た事情は、「仕事を探しに」が多く、これに「人間関係の揉め事で」が続く。これは、マニラへの移住者の一般的事情に照らし、妥当な結果と思われる。ただしこれは、マニラへ来た「おもな」事情であり、実際は「仕事」と「人間関係の揉め事」が複合する回答者が多いと思われる。「人

間関係の揉め事」のほとんどは、「家族関係の揉め事」である。それは、前記の「家族背景」の実態に照応する。揉め事の背後には、困窮生活が控えている。「紛争のため」も、前記のケースである。最後に、「勉強のため」マニラへ出た回答者が、わずか1ケースである。一般に、勉強のためマニラへ移住する若者は多い。当調査の回答者のマニラ移住は、逼迫した事情にあった。

以上は、次のように整理される。まず、回答者にマニラ生れがいる。次に、回答者の大半は、フィリピン全土から来た。次に、移住者は、若い頃にマニラへ出て、マニラに長く住んでいる。これは、マニラへの移住者一般の傾向なのか、ホームレスになる人々の特徴なのか。それを判断するには、回答者がホームレスになった時の年齢と、野宿期間の長さをみなければならない。それは後でみる。最後に、回答者は仕事を求めて、また、家族の揉め事を逃れてマニラへ移住した。

街路生活

回答者は、いつから、どのような街路生活をしているのか。つまり、上記の回答者の生活歴は、どのように街路へ引き継がれたのか。以下、これを街路生活への経緯、生計、家族関係（ネットワーク）について分析する。

(1) 街路生活の経緯

回答者は、何歳の時に街路生活を始めたのか。表10をみられたい。

まず、10歳代が6人である。これは、街路で親と暮すストリート・チルドレンの経験者と思われる。そこには、マニラ生れの回答者も含まれると思われる。マニラで生れ、街路で育ち、ホームレスになった回答者である。次に、20歳代、30歳代が多い。街路生活を始めた平均年齢は、31.2歳である。回答者は、若年期から壮年初期に街路生活に入っている。この表と表7を重ね合わせてみられたい。すると、マニラへ移住した回答者では、その多くが、若い頃にマニラへ出て、まもなく街路生活を始めたと思われる。このことは、街路生活の期間で確認される。表11をみられたい。

表10 街路生活開始時の年齢

10歳代	6
20歳代	8
30歳代	6
40歳代	3
50歳代	3
60歳代	1
不明	2
計	29人
平均年齢	31.2歳

表11 街路生活の期間

1年未満	5
2ヶ月以上	1
3ヶ月以上	3
6ヶ月以上	1
1年以上～2年未満	1
2年以上～3年未満	3
3年以上～4年未満	2
4年以上～5年未満	1
5年以上～10年未満	3
10年以上～20年未満	10
20年以上	3
不明	1
計	29人
平均年	9.4年

街路生活1年未満がわずか5人である。1年以上5年未満が7人、5年以上が16人である。街路生活が長い回答者が多く、しかも10年以上が13人に上る。全体に街路生活が長い。街路生活の平均年数は、9.4年である。この表を表8と重ね合わせてみられたい。マニラへ移住した回答者では、（表11からマニラ生れの回答者を差し引いたとして）その多くで、マニラ在住の期間と街路生活の期間が対応すると思われる。ここから、若い頃にマニラへ出て、まもなくホームレスになって、今日に至ったという、街路生活への基本コースがうかがわれる。表10で、50歳代以上の高齢の回答者が4人と少ない。他方で、回答者の街路生活が長い。この事実は、上記の推定を裏づけている。

では回答者は、いかなる事情で街路生活を始めたのか。表12をみられたい。

表12 街路生活を始めた事情（複数回答。事情は回答者の言葉通り）

仕事がない	7
家賃を払えない	4
家の撤去にあつて	4
火事で焼け出されて	1
家に居られなくなって	7
家族の死亡・離婚のため	2
街路の家族・結婚相手と暮すために	4
シェルターを逃れて	1
不明	4
計	34人

「仕事がない」（7人）は、金がないことであり、「家賃を払えない」（4人）は、金がないためである。「家の撤去にあつて」（4人）、「火事で焼け出されて」（1人）も、金がないため代わりの住居が確保できないという意味である。つまり、回答者の16人が、困窮のため住居を確保できず、街路へ出ている。「街路の家族・結婚相手と暮すため」も、背景に困窮生活があったと思われる。次に、「家に居られなくなって」（家族関係の揉め事）「家族の死亡・離婚のため」の回答者が8人である。これは、家族の崩壊状態のために街路へ出た人である。この回答者の中に、表3および表8における家族関係の崩壊状態の回答者がいると思われる。当調査では、ホームレスになる前の居住形態について聞いていない。しかし、マニラで生れた人も、地方から来た人も、困窮生活の状態にあり、その多くはスクオッターに住んだと推定される。最後に、「シェルターを逃れて」が1人と少ない。前掲のホセ・ファベラ・センターでは、センターを出て街路へ舞い戻るリピーターが少なくない（Colico et al.,2011:30）。しかし、マニラのホームレスのシェルターは、そこだけである。ゆえに、リピーターが多いとはいえ、全体として、シェルターへ入るホームレスは少ない。当調査で、シェルターを出た回答者が少ないのも、そのためである。

街路生活の凌ぎ

回答者は、街路生活をどのように凌いでいるのか。これを仕事（現職）についてみる。表13をみられたい。

回答者は、多様な仕事に就労して街路生活を凌いでいる。工場労働者1人を除いて、すべて零細自営または一人仕事の雑業の仕事である。中でも野菜や菓子を売るヴェンダー、廃品回収人が多い。これに駐車場整理員が続く。一般に、これらに物乞いを入れて、ホームレスの主要な仕事としてある。表は、ほぼそれに照応する。また表は、表6の最長職で雑業の仕事を答えた回答者の多くと重なると思われる。無職者は、同居者（3人は夫）が仕事をしている。女性の回答者は17人であるから、14人は街路で働いていることになる。表13は複数回答であり、複数の仕事をしている回答者は7人である（36人マイナス29人）。しかし、実際はもっと多くの回答者が、複数の仕事をしていると思われる。他方で、グローバル経済のもと、今後の街路に、ますます多様な仕事が見れると思われる。

表13 現職と収入（ペソ／日平均）（複数回答）

職 種	人数	収入/日（ペソ）
工場労働者	1	不明
ヴェンダー	6	83～137
肥料袋詰め人（月1～2週）	1	200～300
マッサージ師	1	0～500
チェスプレーヤー	1	100～200
炊出し皿洗い（週1回）	1	50
廃品回収人	5	192～300
墓守り	3	47
駐車場整理員	3	277～293
物乞い	2	100～150
建設労働者（不定期）	1	650
輪タク運転手	1	50～100
小型バスの客呼び込み	1	300
マニキュア師	1	不明
ストロー作り	1	不明
無職	4	0
同居者輪タク運転手	2	250
同居者駐車場誘導員	1	40～200
不明	1	不明
計	36人	

最後に、1日当りの収入である。まず、収入の開きが大きい、収入形態も異なる、月の稼働日数が分からない等のため、平均収入を算出することは叶わない。むしろ、仕事により日により収入の開きが大きいことが、雑業の仕事の不安定さを物語っている。また仕事の多くは、収入200～300ペソと極貧水準にある。2012年のマニラの最低賃金（非農業）は、456ペソであった（NSCB, 2013: 11-17）。回答者が複数の仕事をもつのは、必然である。

このような街路での不安定で低位な収入を補填するため、回答者は、行政等の援助を必要とする。しかし、援助の実態は乏しい。表14をみられたい。

ここから、次のことが指摘される。まず、複数回答にもかかわらず、援助「あり」と答えた回答者が少ない（24人）。「なし」が10人に上る。次に、家族の援助を受けた回答者が少ない。これは、

表14 受けている援助（複数回答）

援助の有無	人数
あり	24
家族	2
社会福祉開発省	6
NGO	6
財団	1
教育機関	3
組合	1
宗教団体	2
個人	2
団体不明（炊出し）	1
なし	10
不明	1
計	35人

家族が遠くにいるか、家族も貧しいか、街路で家族といるため相互の扶助を「援助」と認識していないかのいずれかである。次に、社会福祉開発省の援助を受けた回答者が少ない。同省は、マニラの街区ベースにホームレスを含む困窮者の援助活動を行っている（DSWD-NCR, 2011）。しかし、その援助に預かることのできるホームレスは、ごく一部である。援助を受けた回答者が少ないのは、その表れである。回答者は、不安定で低位な収入のもと、街路で自力で生活を凌いでいる。

家族関係（ネットワーク）

当調査の大方の回答者は、街路で家族・親族・友人と暮している。その実態は、どうであろうか。その前にまず、街路生活に入る前を含む、回答者の人間関係とくに家族関係についてみる。回答者の婚姻歴をみると、既婚・同棲中の人々が23人、離婚・（同棲者と）別居中の人が3人、未婚の人が3人である。子どもをもつ回答者は24人で、1人平均3.6人の子どもをもつ。ここから、回答者の多くは、結婚経験者であり、少なからぬ子どもをもつ人々である。結婚した時期が街路生活を始める前であるか後であるかは、分からない。

ほとんどの回答者は、同伴者と街路で暮している。当調査で、同伴者が「あり」と答えた人は23人で、「なし」は1人であった（「不明」5人）。「あり」と答えた人は、だれと暮しているのか。表15をみられたい。

これは複数回答で、回答数は31である。つまり、8人が複数のカテゴリーを挙げている（31人マイナス23人）。回答数31の内、「家族」「夫婦・同棲者」「子・孫」と暮す回答者は25人で、これに親族を入れると26人になる。つまり、回答者の大半は、街路でファミリー・ホームレスをなしている。人々は、街路で家族・親族（ときには友人・仲間さえ含む「擬似拡大家族」）のコミュニティ

を作っている。

表15 同伴者「あり」の内訳(複数回答。関係は回答者の言葉通り)

同伴者との関係	人数
家族	5
夫婦・同棲者	11
子・孫	9
親族	1
友人・仲間	5
計	31人

回答者の家族・親族ネットワークは、離れて暮す家族・親族へ広がる。当調査によれば、離れて暮して連絡を取り合う家族・親族が「あり」の回答者は、16人である。「なし」は12人である（「不明」は1人）。「なし」の多くは、現に街路で家族・親族と暮している人と思われる。他方で、回答者のほとんどは、連絡を取り合う家族・親族から物質的な援助を受けていない（表14で「家族の援助を受けている」のは2人だけ）。しかしそれでも、家族・親族との連絡は、街路で暮す回答者には精神的な支えになっていると思われる。

ここで、ファミリー・ホームレスについて、3つの補足が必要となる。一つ、当調査の回答者でファミリー・ホームレスをなしている人は17人である（同伴者「あり」の23人マイナス「友人・仲間」5人）。単身者（「友人・仲間」「なし」の人）は、6人である。では、マニラのホームレスの全体ではどうなのか。ホセ・ファベラ・センターの前掲資料によれば、収容者の最大集団は単身男性であった。この資料も、ホームレスの全体を伝えるものではないが、単身ホームレスが多いのは事実と思われる。そこに、家族の解体と個人化という社会情勢が作用していると思われる。当調査は、何人かの飛び入り調査を除いて、調査者の知り合いのホームレスを介して対象者を手繰ったため、単身ホームレスが少なくなったと思われる。ゆえに、当調査の結果は実態から偏っている。

二つ、先に回答者の家族には、崩壊寸前にある家族や一人親家族が多いことをみた（表4）。そのことと街路における緊密な家族関係は、どのような関係にあるのか。街路の家族はほとんど、回答者がマニラでつくった家族（パートナーと子ども）である。ゆえに、家族崩壊の原因をなした郷里の親を含まない。もちろん、街路で親と再結合することはあるだろう。しかし当調査では、そのようなケースは確認されていない。

三つ、ファミリー・ホームレスには、家族間の相互扶助がある。それは、困窮生活を凌ぐホームレスにとって、重要な生き抜き資源である。

四つ、しかし、街路で家族コミュニティをもつことは、いいことだけではない。家族（子どもを含む）とともに暮せば、生活費が単身者の場合より嵩む。その分、生活が圧迫されて、より多くの収入の稼得が必要となる。また困窮生活ゆえに、家族関係の揉め事が生じやすい。かつてのような家族の崩壊が、繰り返されかねない。ホームレス・ファミリーは、結合・解体・再結合を繰り返している。

4 マニラのホームレス

本稿前段（1節）で描かれたマニラのホームレス像と、後段（2節）で描かれたそれとは、どの程度照応するのか。つまり、後段のデータは、前段の仮説的描写をどの程度実証しているのか。最後に、この確認が必要となる。

ホームレスXとホームレスY

回答者29人によるデータの分析から、次のような回答者の平均像が浮かび上がる。地方出身の回答者をホームレスXとする。ホームレスXは、現在42歳である。かつて生育地で、崩壊寸前の家族で生育し、学校を出て、下層の仕事に就労した。まもなくそれを辞め、仕事を求めてマニラへ出た。22歳の時である。マニラで、およそ10年間、スクオッターに居住して、下層の仕事に就労した。そしてその仕事を失って（変えて）、街路生活に入った。31歳の時である。その前後に、パートナーを得て家族をつくり、子どもを設けた（ファミリー・ホームレスの形成）。それからおよそ10年間、雑業的仕事を遍歴して街路生活を続け、現在に至っている。

次に、マニラ生れの回答者をホームレスYとする。ホームレスYは、ホームレスXが経験した生育家族、学校、下層の仕事のマニラで経験したことになる。つまり、マニラで生れ、下層の仕事をし、階層下降し、街路に押し出され、そのまま現在に至っている。

ここから、次のような回答者のホームレスへの道程が要約される。一つ、マニラ生れのホームレスがいる。二つ、ホームレスには、マニラへの移住者が多い。三つ、若い頃にマニラへ移住した。四つ、マニラの在住期間が長い。五つ、壮年期初期にホームレスになった。六つ、ホームレス期間が長い。七つ、にもかかわらず、今なお壮年期にある。八つ、ファミリー・ホームレスが多い。

マニラのホームレス像

本稿は、フィリピンのホームレス像の、そのマニラのホームレス像の、その一部の29人の回答者にみるホームレス像について分析した。回答者は、崩壊寸前の家族のもとで生育した。その家族の揉め事の背後には、困窮生活があった。学校を出て、下層の仕事に就労した。そしてその後、マニラへ出た。理由は、「仕事を求めて」「家族の揉め事を避けて」であった。そこにも困窮生活があった。マニラで下層の仕事に就労した。その後、雑業的仕事に就労した。それは、回答者が街路生活を始めるのと同時であった。そして雑業的仕事をして、現在に至っている。ここで注目されるのは、職業階層における、回答者の最長職と現職の地位が、あまり変わらないことである。そして、街路生活が、すでに長いことである。つまり回答者は、下層の仕事世界を還流して、現在に至っている。回答者は、仕事の喪失（失職）が最大原因で街路生活に入ったというより、長い間、不安定で低位な収入の雑業的仕事に固定され、持続的な困窮生活を送ってきた。そこにこそ、当調査の回答者の際立つ特徴がある。つまり、回答者の最大の特徴は、労働ではなく困窮生活、つまり〈貧困〉である。また回答者は、ファミリー・ホームレスであり、パートナーと子どもを扶養しなければならない。家族結合には、相互扶助の機能があるが、それは部分的である。生活の基本を支える雑業的仕

事は、不安定で、収入は小さい。また、行政の援護活動の恩恵を受ける機会も少ない。そのため回答者は、困窮生活に据え置かれる。こうして、回答者が街路生活に入る前、入った時の事情、入った後のいずれにおいても、〈貧困〉が深い影を落としている。

もとより、29人の回答者の集団的特徴をそのままマニラのホームレス像に拡大することはできない。マニラのホームレス像をより十全に描くためには、多様なレベルの多様な実証研究が蓄積されなければならない。本稿は、そのささやかな石積みである。

(あおき・ひでお 特定非営利活動法人社会理論・動態研究所研究員)

※本稿は、科学研究費の基盤研究 (B) 「グローバル・シティにおけるホームレスの労働・居住をめぐる国際比較研究」 (研究代表者山口恵子) による調査研究の成果の一部である。

【参考文献】

- 青木秀男 (2007) 「フィリピン・マニラのストリート・ホームレス——グローバリゼーションと都市変容の表徴として」 コミュニティ・自治・歴史研究会編『ヘスティアとクリオ』 東北大学吉原直樹研究室 5号, 31-52頁。
- (2011) 「途上国都市の変容とホームレス—マニラの場合」 大阪市立大学都市文化研究センター編『都市の歴史的形成と文化創造力』 清文堂, 199-221頁。
- (2013) 『マニラの都市底辺層—変容する労働と貧困』 大学教育出版。
- Aoki, Hideo (2008) “Street homeless as an urban minority : A case of Metro Manila”, in Globalization, minorities and civil society : Perspective from Asian and Western cities, edited by Kioshi Hasegawa and Naoki Yoshihara, Melbourne : Trans Pacific Press, pp.154-172.
- Aoki, Hideo (2013) “Pathways to Street and Spatial Politics on Homelessness in Metro Manila : In the Context of a Global City of Developing Country, ”特定非営利活動法人社会理論・動態研究所編『理論と動態』 6号, 114-139頁。
- Colico, Ada A., Mark M. Garcia & Nilan Yu (2011) “Out of the Center and Into the Streets : How Repeatedly Rescued Clients of Jose Fabella Center, Find Their Way Back to Homelessness”, Social Welfare and Development Journal 5 (1), Manila : Department of Social Welfare and Development, 29-48.
- DSWD-NCR, Department of Social Welfare and Development-National Capital Region (2011) by internal information gotten on July 13th, 2011. Manila.
- Drummond, Lisa B.W. (2000) “Street Scenes : Practices of Public and Private Space in Urban Vietnam.” Urban Studies, 37 (12) : 2377-2391.
- DSWD-NCR, Department of Social Welfare and Development-National Capital Region (2011) by internal information gotten on July 13th, 2011. Manila.
- JFC, Jose Fabella Center (2011a) internal information gotten on July 13th, 2011. Manila
- (2011b) Center Guide Bookmark gotten on July 13th, 2011, Manila.
- MMDA, Metropolitan Manila Development Authority (2011) material made by Metropolitan Social Services Office, July 19th (2011) Manila.
- NSCB, National Statistical Coordination Board (2013) Philippine Statistical Yearbook
- 隅谷三喜男 (1967) 『日本の労働問題』 東京大学出版会。